

## 教室で読む『鼻』

— 〈語り手〉が語る「愛すべき内供」の自意識の変転—

山梨県立塩山高等学校 古守 やす子

### 1 はじめに

芥川龍之介の『鼻』は、従来高校「現代文」の定番教材である。令和4年度より新学習指導要領が実施されてからも、新科目「文学国語」の教科書(第一学習社「標準文学国語」)に採録されている。

『鼻』は長い鼻を苦しむ高僧が主人公であるが、容姿を過度に気にし悩むのは思春期の生徒たちにとって、非常に身近なことと言える。特に高校生のスマートフォンの所持率が100%に近い現在、ユーチューブや、フェイスブック、インスタグラム、ツイッター、ライン等で情報を受配信、共有する中で、「インスタ映え」を意識し、「いいね」や「フォロワー」の数を価値の基準とし、存在価値とまで考える状況がある中で、人に「どう見られるか」を意識する生徒達が、『鼻』を読む意義は大きいと考える。

文学作品を読むことは、一人一人の読み手に立ち上がる〈読み〉と個々が向き合うことである。読み手は、自己(主体)の意識を超えた〈了解不能〉の領域、すなわち、田中氏の提唱する〈第三項〉の領域と対峙した時、既存の自己は壊れ、新たな自己が再生する。〈読み〉は、「解釈の多様性」という個々の解釈にとどまらず、個々の読みでありながら、自己を超えた領域を抱えて作品と共鳴するものとなり、個々の〈読み〉は個々を超えて深いところで他者と響き合う〈読み〉となる。このような〈読み〉を教室で目指し、授業を行いたいというのが稿者の願いである。

田中実氏は、文学作品の読みの方法について次のように述べる。

〈近代小説〉を読むとは、限られた出来事、時間の流れであるストーリーを構成するプロットを考証・論考する行為とわたくしは考えません。客体の文章は読書行為によって読み手のコンテキストと化しています。我々読者はこれを捉えるのであり、それはプロットをプロットたらしめる〈メタプロット〉(＝内的必然性による文章の羅列)を捉えるべく、〈捉え—捉えられる〉、〈語り—語られる〉相関の現象を読む、これを考証・論証と考えます。(傍線引用者)

『羅生門』の読みの革命—〈近代小説〉の神髄を求めて— (『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 高等学校』2018年 明治図書)

視点人物をいかに相対化するか、これが問われます。(略)視点人物自身が想定している対象を読むだけではなく、相手の内側に立つ必要があります、それには主客相関のメタレベルから捉える〈語り〉の領域、すなわち作品全体を構成している〈機能としての語り手〉のまなざしを必要とします。〈機能としての語り手〉のまなざしから見れば、作中人物それぞれのまなざし(パースペクティブ)の複数性、他者性がいかに互いに組み合わされているのかを読み解くことができます。それによってプロットをプロットたらしめている出来事の〈仕組み〉である〈メタプロット〉を捉えることができます。これが〈深層批評〉です。そこではリアリズムの臨界、〈第三項〉を前提とすることが要請されます。(傍線引用者)「近代小説の《神髄》—「表層批評」から〈深層批評〉へ—」(『都留文科大学研究紀要』第95集 2022年3月)

田中氏の読みの原理を踏まえ、旧課程の「現代文 B」の授業での『鼻』の実践を振り返り、『鼻』を教室でどのように読んだらよいかを考えたい。

### 2 『鼻』の授業について (※授業者が『鼻』を授業で扱うのは初めてである)

科 目	現代文B
使用教科書	第一学習「高等学校 改訂版 標準現代文B」
対象生徒	山梨県立塩山高等学校 2学年(計33名)
授業時間	全8時間 (2023年1月実施)

備考 生徒たちは、小説教材として、1年次に『とんかつ』(三浦哲郎)、『羅生門』、『夢十夜』を学習し、2年次では、『デューク』(江国香織)、『ナイン』(井上ひさし)、『こころ』を学習してきた。

### 3 指導書における『鼻』の主題

指導書における主題の説明には、「『鼻』の批評・検討の類は、百を下らない。(略)それらの幾つかを、参考に供しておこう。」として、論者の名は掲げずに次のように列挙している。

- 「期待の充たされた後の不安」
- 「理想は理想である間が尊い」
- 「諦念による奇形的条件の克服」
- 「心理の三段の変化と幸不幸の相対性」
- 「エゴイズムに対する諦観」
- 「矛盾の同時存在と人生における価値の相対性」
- 「神の与えたものを人間が変えようとすれば、必ず罰せられるという道徳的意味」
- 「偶像破壊」
- 「自覚的な自己の生の選択」
- 「自我喪失の悲劇」 等々。

そして、芥川自身の

「僕は鼻で身体的欠陥の為にたえず vanity (虚栄心) のなやまされてゐる苦しさを書かうとした。haupt (最も強調したい) な点はその点である。さうしてその点では僕も十分に成功したとは思つてゐない。唯實際身体的欠陥に(如何に微細なものでも)悩んだ事のある人は幾分でも内供の心もちに同感してくれるだらうと思ふ」(「鼻」創作ノート。)

を紹介した上で、主題を「長大な鼻に自尊心を傷つけられている高僧が鼻の長短に一喜一憂する姿を通して、自尊心や傍観者の利己主義という問題、幻滅しきれぬ人間の幸不幸という悲喜劇を、愚かで「愛すべき」人間の問題として提起している」と述べている。

### 4 『鼻』を授業でどう読むか ～『鼻』を語る(語り手)～

『鼻』は、『羅生門』が「帝国文学」(大正4年11月)に発表された3か月後、第四次「新思潮」創刊号(大正5年2月)に発表された。『羅生門』と同じく、『今昔物語集』等の古典を題材にした、三人称の小説であり、『羅生門』の「下人のサンチマンタリズムに影響した」という語りと同様、「内供の自尊心は、…あまりにデリケートにできていたのである」「傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにはほかならない」と、明らかに、近代人の感性を全面に出して、平安時代の登場人物を語っている。

前述の様々な「主題」を前に、授業者としては、どのように授業を進めたらよいか戸惑わずにはいられなかったが、芥川自身が述べる「Vanity (虚栄心) のなやまされている苦しさ」が書かれていることは明白であり、その「苦しさ」がどのように語られているかを読んでいきたいと思った。

『鼻』は、三人称の〈語り手〉(注1)によって語られている。「内供」を視点人物とし、〈語り手〉は「内供」の視点で語ってゆく。内供の自己認識及び内供のまなざしによる周囲の人々と、〈語り手〉が捉える内供と周囲の人々がどう組み合わされているか、〈語り手〉はこのストーリー(プロット)をなぜ語るのか、すなわち、プロットを支える〈メタプロット〉は何かを、〈語り手〉を意識して読んでいくことで、生徒一人一人が作品に迫っていくことを目指し、授業を次のように計画した。

- 1 視点人物の「内供」の心の動き、まなざしを追い、内供の心に添いながら、ストーリーをたどる。
- 2 〈語り手〉の視点で、「内供」、周囲の人々を見つめる。
- 3 〈語り手〉について考える。

(しかしながら、1の「ストーリーをたどる」ことで、精一杯となり、2、3については、「試みた」ということに留まり、目指したい授業には遠いものであることを最初に述べておく。)

## 5 授業展開

- 1時間目 導入。音読。初読の感想
- 2～5時間目 一段落～六段落の精読
- 7・8時間目 「内供の心」と「人々の心」を〈語り手〉の視点から俯瞰して捉える。

### 【一時間目】…初読の感想

〈感想〉

- ・「鼻」という作品があることは知っていたが、こんなに面白い作品だとは思わなかった。
- ・お坊さんでも鼻が長くて悩んでいるのだと思った。
- ・鼻を気にしていることを知られるのが嫌なところ、表面では気にしていないような顔をしているところ、日常の談話にコンプレックスなワードが出てくるのを恐れるところなど共感するところが多くあった。(多数)
- ・鼻を茹でて短くしたところが面白かった。せつかく短くなったのに、周りに笑われて嫌になるのが矛盾していると思った。・長くても短くなくてもどっちにしろ笑われるのだと思った。
- ・長い鼻を短くしたら笑われて、しかも周りを不幸にしまいびっくりした。
- ・短くなった時、子供にあたって最低だと思った。
- ・長い鼻で笑われていて、それが普通になったらそれも悪く言われてかわいそうになった。(複数)
- ・最後に鼻が元に戻って良かった。・大切なものは失ってから気づくのだと思った。
- ・鼻を嫌がっていたけれど、生まれてからずっといっしょだったから愛着あると思った。
- ・最後に元の鼻に戻った内供は新たに気づけたことがあるのではないかと思った。

〈疑問〉

- ・なぜ鼻が長いのか。(複数) ・なぜ鼻なのか。 ・なぜ茹でただけで短くなったのか。
- ・なぜ鼻が一晩のうちに元にもどったのか。(複数) ・短くなったのになぜまた長くなったのか。
- ・結局この人は、短いときの方がいいのか、長いときの方がいいのか？
- ・なぜまた鼻が伸びたのが嫌ではないのか。 ・鼻を短くするほど、人の目が怖かったのか。

### 【二時間目】…第一段落の内容「禅智内供の鼻・禅智内供について」

授業のポイント

年齢…五十歳。僧侶としての地位…内道場供奉の職  
「始終この鼻を苦に病んできた。」「表面ではさほど気にならないような顔をして澄ましている。」

◆「一段落を読んで、禅智内供について思ったことを自由に書こう。」

内供への共感

- ・私もいくつかコンプレックスがあるから内供の気持ちがよくわかる。気にしないようにすればするほど気にしてしまう内供を楽しんであげたい。(多数)
- ・苦しんでいるのがかわいそう。気にしないような顔をしているのは辛い。相当気にしている。(複数)
- ・悩みを知られないようにふるまっているのがすごい。(複数)
- ・他の人と違うのは誰もそうだけれど、大きく違うと他の人の視線も全て怖いと思いました。内供の気持ちを考えると私も苦しくなりました。(複数)

### 僧侶なのに悩んでいる

- ・高い地位にいても同じ人間であると思った。コンプレックスと向き合うのは容易ではないと感じた。
- ・五十歳を超えた浄土を渴仰すべき僧侶の身でも病んでいる。高い地位だけど普通の僧侶。
- ・周りの人の視線におびえながらも、僧侶というプライドを捨てず弱い姿を見せないところがかっこいい。

### 内供への批評

- ・気にしているなら誰かに相談すればいいのにと思った。
- ・気にしていると、そのことが人にはわかると思う。気にしない方がいいと思う。

※ 生徒は内供に同化し、コンプレックスに苦しむ気持ちに共感した。高僧でありながら悩むところにも親近感を持って受け止めている。また解決策を提案する者もいた。

【三時間目】…第二段落の内容「内供が鼻をもてあました理由」

第三段落の内容「鼻を短く見せる消極的および積極的方法」

授業のポイント

(二段落)「この鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんだ。」  
(三段落)長い鼻を実際以上に短く見せようと鏡に向かっていろいろな角度から顔を映す。  
「ため息をついて、不承不承にまたもとの経机へ観音経を読みに戻るのである。」

- ◆「僧侶である内供が『不承不承に…観音経を読みに戻る』とはどういうことだろう」
- ・仕事の観音経を読む方が大切だけれど、自分の鼻の方を優先させている。(複数)
- ・観音経を読みにしぶしぶ戻るとは、鼻に対してすごく不満でいる。(複数)
- ・鼻が長く見えて鏡を見るのが嫌になってしまったのでお経を読むことにしようと思った。
- ・ため息が出るほど辛くなり、そのことを考えたくないと思っている。(複数)心を落ち着かせようとしている。
- ・成功しなかったので残念な気持ちで帰っている。(複数)・一旦諦めて、また次回ためそうと思っている。
- ・本来の仕事が手につかないほど、内供にとって長い鼻はコンプレックスだった。
- ・内供の必死さはわかるが、僧なんだから、どう直すのかではなく、どう向き合うかが重要なかなと感じた。
- ・不承不承に観音経を読むのもだけど、自分と同じような長い鼻のやつを見つけて楽になろうとか、仏教に反していると思った。

※ 生徒たちは「僧侶」という点より、仕事・本業が疎かになるほど悩んでいる、という悩みの方に重点をおいて受け止めた様子が窺える。長い鼻の者を見つけようと必死なところに、僧侶らしからぬことを指摘する者もいた。

【四時間目】…第四段落の内容「長い鼻を茹でて短くする→短くなる」

授業のポイント

鼻は、ほとんど嘘のように委縮して…「こうなれば、もう誰も笑う者はないのにちがいない。」  
明るる日…鼻は依然として短い。「法華経書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になっ

◆「第四段落の感想を書こう。」

短くなって嬉しい。

- ・やっとなくなって今までの願いが実現しすごく嬉しかったと思う。弟子にも迷惑をかけることがなくなり、気が楽になったと思う。(多数)
- ・短くなっても素直に喜べないところが内供らしい。(複数)

### 弟子たちのおかげ

・弟子の僧たちによって短くなり、弟子たちは内供にとっていちばんの理解者だと思った。弟子たちは優しい。(複数) 弟子が内供に協力的になってくれるのは内供がこれまで弟子たちに優しくしていたからだと思う。

### よかったが…

・短くなってよかったが、弟子に自分を説き伏せさせるのではなく、自分から短くしたいと言えよと思った。  
・内供の晴れ晴れしい気持ちがよくわかる。でも一時の夢のようなものだと思う。

※ 生徒たちは「もう誰も笑う者はいない」という言葉ごと内供に共感し、鼻が短くなった内供の嬉しさを想像した。生徒たちの喜びは、協力した弟子たちへの感謝にまで及ぶ。これに対し、授業者は「内供は感謝しているか」と問いかけ、考えてみればよかったと思っている。また、生徒たちは「のびのびした気分」を理解するが、それが僧侶として達成感を得る「法華経書写の功を積んだ時」と同じ気分であること、すなわち「法華経書写の功」と「鼻」が短くなったことを同等に捉えていることについては特に気に留めることはなかった。

【五時間目】…第五段落の内容「鼻が短くなった二、三日後の周囲の者の変化・傍観者の利己主義」  
授業のポイント

内供のつぶやき「前にはあのようにつけつけとは笑わなんだて。」  
「愛すべき内供」は、ぼんやり普賢の画像を眺めながらふさぎ込んでしまう。  
「内供には、遺憾ながらこの問いに答えを与える明が欠けていた。」  
「内供が、理由を知らないながらも、なんとなく不快に思ったのは…この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにはかならない。」「なまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなった。」

◆五段落を読んで思った事を書こう。

### 笑われてかわいそう

・せっかく鼻が短くなったのに、侍や中童児や下法師たちが馬鹿にしたようにくすくす笑って、内供がかわいそうだと思った。(多数) みんなに笑われ鼻を短くしたことを後悔する内供がせつなくて、かわいそうに思えた。  
・鼻が短くなって嬉しいはずなのに、周りの反応が想像とはちがっていた。いじめみたいな周りの反応にふさぎこみ、鼻が恨めしくなるのかもしれないと思った。  
・鼻が長くても笑われ、短くなくても笑われ、悩む。他人の目が気になるのはよくわかる。

### 弟子にあたるのはおかしい

・内供は笑われる訳がわかっていない。(複数) 内供に同情するが、弟子に厳しく当たるのはおかしい。人の事は無視すればいいのに。内供は繊細過ぎる。・短くなったのに恨めしくなった内供のことが嫌いになった。

### 傍観者の利己主義

・「利己主義」という言葉に共感した。(複数) 他人の幸福を喜ばないのは人の一番よくないところだと思う。  
・人には利己主義があるからしょうがないと思った。数人でもほめてあげてほしかった。  
・幸せになった他人を不幸にしたいという人間の欲求が敵意を生む。いじめへとつながってゆく。現代に通じる。  
・人は自分以外の誰かが不幸であれば優越感に浸ることができる性質を持っていると思う。私たちの中でも同じようなことがあるんだろうと思った。内供は敵意を持たれかわいそうだと思った。

※ 内供に寄り添う生徒たちが、内供が今までと違い馬鹿にされたように笑われることに、多くの生徒が「かわいそう」と述べた。しかし、内供が笑われる理由がわかっていないことを生徒たちは指摘する。それゆえ、弟子に厳しく当たる内供を批判する。また、「傍観者の利己主義」という説明に納得・共感するが、生徒たちはこれを〈語り手〉が述べているという意識はなく、このことを後に改めて生徒たちに意識させることとする。

【六時間目】…第六段落の内容「鼻がまた長くなる」

授業のポイント

内供のつぶやき…「無理に短うしたで、病が起こったのかもしれない。」  
「仏前に香花を供えるような恭しい手つきで鼻を押さえ」  
翌朝、「庭は黄金を敷いたよう明るい。」「薄い朝日に、九輪がまばゆく光っている。」  
鼻が元の長い鼻→「短くなったときと同じような、はれはれた心持ちが、どこからともなく帰ってくる」  
「—こうなれば、もう誰も笑う者はないにちがいない。」「長い鼻を明け方の秋風にぶらつかせながら。」

◆「仏前に香花を供えるような恭しい手つきで鼻を押さえる」この時の内供の気持ちは？

- ・鼻がどうなっているのかわからず不安な気持ち。恐怖。(複数)
- ・罰があたったのか。
- ・病に冒された鼻が早く治るように。(複数)
- ・鼻をやさしくいたわる気持ち。(複数)
- ・鼻を礼儀正しく丁寧にさわり、大丈夫かと心配している気持ち。(複数)

※ 授業者が、この作品で非常に重要と考える箇所である。「恭しい手つき」を、生徒たちは内供が今までと違う心境であることを読み取るが、これまでと決定的に異なる行為であるため、あらためて、次のように確認し、「恭しい手つき」から読み取れる内供の心理(意識)の変化について注意を向けさせた。

確認

※自身の鼻を「仏前に供える香花」のように「恭しい手つき」で扱うことは初めて！？



翌朝、庭は黄金を敷いたよう明るく、薄い朝日に九輪がまばゆく光っている。



鼻が元の長い鼻になっている。

◆最後の一文「長い鼻を明け方の秋風にぶらつかせながら。」から、内供の今の気持ちを想像して書こう。

長い鼻を受け入れる

- ・鼻が元に戻った安心と、なつかしさ。結局これでいいんだという自分の中での納得もあったと思う。風にうたれてすがすがしい気分である。(複数)
- ・なんだかんだいってもこの鼻がしっくりくる。もう笑われないと考えたらすっきりした。(複数)
- ・自分はこの鼻と一緒に生きていく。(複数) ・自由になった。 ・内供は本当の自分を見つけた。
- ・長い鼻を受け入れようと前向きな気持ち。もしかしたら、元に戻った鼻に対して周りの反応が楽しみだというわくわくしたような気持ちになっているかもしれない。
- ・もう短くなったときのような嫌な笑われ方はしないと、ほっとしている。私は内供は長い鼻の方が良いと思う。その方が内供らしいので。(複数)
- ・自分の鼻を恥ずかしくないといいことだと思う。
- ・まわりのみんなは長い鼻の内供の方が好きだと思う。

あきらめ

- ・自分の鼻を短くすることは不可能であると悟っている。

同じことを繰り返す

- ・内供は心の底から嬉しそうだ。でも自分は、また同じことを繰り返すと思う。内供が他人の目を気にしないで生きることを祈る。
- ・鼻が長くて短くても笑われ、秋風にゆられながら、ぼーっとどうしたらいいのか考えている。

※ 最後の一文から内供の気持ちを考えさせた。ほとんどの生徒が、長い鼻を受け入れて「すがすがしい気分」「すっきりした気持ち」と想像し、「自由になった。」「わくわくしたような気持ち」と述べた。極少数、「短くすることは不可能と悟った」「また同じことを繰り返す」と想像した。受け入れるのか、諦観するのか、また繰り返すのかは、研究者の間でも意見が分かれるところだが、〈語り手〉は内供をどう捉えているのか、次回の授業で考えさせることにした。

\*\*\*\*\*

【七・八時間目】「内供の心」と「人々の心」を、〈語り手〉の視線(どう語っているか)で考えよう。

I 鼻が長かった時

内供 「苦に病む」「鼻を気にしている」「人に知られるのが嫌」「自尊心が傷つく」「人の鼻を気にする」  
→ 鼻が恥ずかしい・鼻が嫌でたまらない・短くしたい



人々 《弟子たちが介助・内供の俗でないことを幸せだと言う池の尾の町の者》  
→ 不便な内供を助けたい・普通と違う鼻に同情  
《鼻を粥の中へ落とした話は、京都まで喧伝された》

- ・ おもしろい (好意) → 驚き・興味・世の中には色々な人がいる・珍しい・チャームポイント
- ・ おもしろい (悪意) → 見下す・小バカにする・あざ笑う・変だと思ふ

〈授業者のまとめ・問いかけ〉  
全ての人々が鼻を笑っているわけではない。  
 → 全ての人が笑っている、と思っているのは……内供! ?  
 ↓  
 内供の自意識…内供の目に映る世界  
 鼻を最もおかしいと思っているのは……内供! ?

II 鼻を短くした時

内供 「もう誰も笑う者はない」・「満足」・「のびのびした気分」 → 嬉しい



人々 「じろじろ鼻ばかり眺める」「吹き出す」「くすくす笑い出す」「つけつけと笑う」

→ 気にしていないようで気にしていたんだ → 軽蔑

→ もの足りない・気に入らない → 「傍観者の利己主義」 → 〈語り手〉の考察

〈確認〉  
 内供には鼻が短くなったのに笑われる理由がわからない。  
 「傍観者の利己主義」にそれとなく感づき、ふさぎ込む

〈語り手〉が見つめる  
 「愛すべき内供」



- ◆ 〈語り手〉が内供を「愛すべき内供」と言っているのはなぜだろう。
- ・ 「高位の僧であるとはいえ、未熟でもいいじゃないか」という気持ちで人間らしい内供を優しいで見ている。
- ・ 高僧らしからぬ未熟な内供をフォローする気持ち。(複数)
- ・ 高位の僧であるにもかかわらず、内供は煩悩でいっぱいだから。(複数)
- ・ 煩悩の塊の内供に少し呆れたから「愛すべき」をつけた。

◆「人間の心には互いに矛盾した二つの感情がある。～この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにはか  
ならない。」は、〈語り手〉の考えであるが、〈語り手〉はなぜこんなことを語るのだろうか。

- ・登場人物の間に中立的な立場だから。内供の外見、内面、内供と人々の関係を客観的に見ているから。
- ・人間には誰かの不幸に同情することもあるのに、不幸も望んでしまうという、人間のドロドロした部分を語り手自身が感じていて、それをこの話を通じて一番伝えたいと思っているからだと思う。
- ・今も昔も人間の心はそういうものだと思いたいから。
- ・人間は他人の不幸に同情する心を持ちながら、幸福になったらまた不幸を願うという意地の悪い部分を持っている。〈語り手〉は生活でそのことを感じていて、そこをリアルに描くことで、新たな人間の生き方を考えてほしいと思っ  
ているから。

### Ⅲ 鼻の異変

《塔の風鐸の鳴る音がうるさいほど枕に通ってくる・寒さも加わり寝付かれない》

《鼻の異変 むずがゆい・むくんでいる・熱》

「病が起こったのかもしれない」



「仏前に香花を供えるような恭しい手つきで」鼻を押さえる

〈授業者のまとめ・問いかけ〉

鼻への思いが変わる。「病」とは!? 自分の力を超えたもの!?

鼻は「仏前に供える香花」に相当するもの。→ 尊い「鼻」

→ 尊い「自分」

今までの「内供」とは違う新たな「内供」!?

### Ⅳ 鼻が再び長くなった時

《翌朝、庭は黄金を敷いたよう明るく、薄い朝日に九輪がまばゆく光っている。》



内供 「こうなれば、もう誰も笑う者はないにちがいない。」「心の中でこう自分にささやいた。」

「長い鼻を明け方の秋風にぶらつかせながら」

→ 長い鼻を受け容れる → 

・嬉しい・はればれ・しっくりくる・この鼻がいい(多数)	・もっと長くていい
・あきらめ	

〈授業者のまとめ・問いかけ〉

内供の目に映る世界 = 輝いている(自然もお寺の九輪も)

「もう笑う者は誰もいないにちがいない。」 → 本当!? 内供の思い込み!?

→ 内供の新たな自意識

短くなった時と同じ? 違う?

「誰も笑わない」 → 確実に笑わないのは誰?

「明け方の秋風にぶらつかせながら」とは? → 秋風に鼻を(身を)をゆだねる

以前長かった時は?



※ 指導書では、「こうなれば、もう笑う者は誰もいないにちがいない。」という内供を、「結局最後まで人に笑われまいとして、自分の心の中だけで自尊心を大切にするとらわれた態度から抜け出られない」とし、最後の一文を「鼻が秋風にぶらついているように内供の今後も不安定であることを暗示している」、「一抹のうすら寒さ、やがて内供に訪れるであろう冬の寒さをも予感させる」と述べている。

人々はどう反応するだろう??

- しっくりくる・元の内供が帰ってきた・よかった・見慣れた姿がいい・元々内供のことが好きだったからこっちのほうがいい・安心した(多数)
- また笑う。(複数) ・ 相変わらず変でおもしろい。 ・ 笑う。でも内供は気にしない。
- 何も言わない(内供はもう気にしていないので。)

〈授業者のまとめ・問いかけ〉

「傍観者の利己主義」という人間観を持っている〈語り手〉は、人々の今後をどう思うだろう。 → また「不幸」になったので笑わない? (人間は不幸な人には同情)

鼻を「秋風にぶらつかせ」る内供を〈語り手〉はどう見ているだろう?

◆ 次の点をふまえてレポートを書こう。

- ・ 禅智内供と周囲の人々を描くことで、〈語り手〉は(この小説は)何を言おうとしているのだろうか。
- ・ この小説を読んで思った事を自由に書こう。

(レポートより抜粋)

私はこのお話を読んで、長い鼻を悩んでいる内供の気持ちがよくわかりました。自分が思っていることと他人が思っていることは違うということ、人は変わるといふことを伝えたいのかと思いました。内供は長い鼻にすごく悩んでいて、努力して鼻を短くしたのに周りの人は長いときよりも笑って、すごくショックだったと思います。ですが、周りの人からしたら、長い鼻の内供の方が好きだったのかも知れないと思いました。なので自分で感じて思っていることと、他の人が思っていることは全然違うかもしれないと思いました。

禅智内供と周囲の人々を描くことによって、人間とはこういうものだと思いたく人に伝えようとしていた。周囲の人々は、内供の鼻が長いことを最初はそう深くは思っていなかったであろうに、短くなったことによって「あいつの鼻なんか変じゃない? 笑」「急に短くなって変だね。笑」など人間の悪い部分が描かれている。また、内供はお坊さんだけど自分の鼻を気にして、周囲の人にどう思われているかを今の中学生や高校生のように気にしていて、私自身とも一致していた。私も自分がどう思われているか気になることがある。周囲の人を気にしているのは辛いし、自由でないと考えた。

この小説は、禅智内供と周囲の人々を描くことで、鼻が長いことで自分が嫌いで人々の目におびえる内供の心と、人間に潜む悪魔的な心の対立を言おうとしたのではないかと思います。私も自分の嫌だと思っている所を他人が何か言っていると思うことがよくあり、内供にとっても共感しました。内供は最終的にありのままの自分を受け入れました。もう人の目におびえることはないと思います。人それぞれコンプレックスを持っていたり悩みがあったりするけれど、結局ありのままの自分が一番で、誰に何と言われても「自分は自分」と思っていれば良いのではないかと思います。

## 6 授業を振り返って 生徒と共に読んできての授業者の読み

### ～ 「内供の世界」の瓦解と再生 一光に満ちた閉ざされた世界へ～

授業者は、授業を通して、この小説を「〈語り手〉が語る『愛すべき内供』の自意識の変転」と読み、さらに「自意識の変転」を「「内供の世界」の瓦解と再生 一光に満ちた閉ざされた世界へ」と読んだ。

なお、田中実氏に『鼻』論があり（『芥川文学研究ノート③『鼻』と『龍』』「都留文科大学研究紀要」1994年3月）、授業者は授業を終えてから、これを読んだ。田中氏の論文による研究史の概要を引用させていただく。

「先行論文を次のごとく大きく三つに分けておく。無論その三つとも小説末、内供は「はればれとした心もち」になるのだから、そのときの内供の意識に解放感があることを疑う読者は誰もいない（はずである）。だが、問題はその解放感がやがて周囲の人々との関係で①新たに「〈思いぞ屈した憂鬱〉」（三好行雄氏）に陥り、それによって「内供のはればれとした心もち」も結果として「錯覚」だったということになるのか。②それとは逆に、内供は「名実ともに高德の僧（宮坂覚氏）になり、作品全体が「明るい」小説となってゆくのか。③あるいはまた、第一の解釈が「はればれとした」解放感を即「錯覚」と捉えるのに対して、一旦「解放された自然な自己」（石割透氏）を奪回しながらも、その「底に薄暗い諦念」が流れていると捉えるべきなのであろうか。恐らく『鼻』論の現在はおおよそ以上のように捉えられるのではないだろうか。」（番号・傍線引用者）

これらは、ストーリー上の「出来事」をどう解釈するかで分かれてくると言える。（「錯覚」「高德」「諦念」の解釈は、ストーリーを追った後に生徒たちが最後の場面の内供を「受け入れる」「繰り返す」「諦める」と解釈したことと重なる。）〈語り手〉がどう語るか、どう捉えているかという視点をもって「出来事」を読むことの必要性を改めて感じる。

田中氏は、『鼻』という小説空間のなかの〈場〉を、「同質性を要求する世界」、「〈公然の秘密〉という微妙な〈いじめ〉をもたらす人間関係」と述べ、内供は中童子を殴ったことで「内面を〈公然〉と露わにし」、これによって「己のあさましさを発見し」「敬虔な境地を得る」。「見られているままの自分dを脱却し、見返す主体を獲得」した内供は、「人々が相変わらず晒すことを熟知」したうえで、「ほどほど、〝そこそこ、〟のところの心境に行き着いた」と論じる。

田中氏は、小説の最後の内供のつぶやきの意味は、『単に誰も晒わないと錯覚』しているというのでも、高德の僧になったというのでもなく「〝そこそこ、〟の所に到り着くという意味に解釈することで（略）文字通り単色の〈明るさ〉や〈暗さ〉などはなく」と述べた上で、「内供はそれまで他人の目を意識するものの、それによって自分自身を、また、他人そのものを見ることができなかった。」「閉ざされたまま生きているのである。」と述べ、「大正四年十一月、『羅生門』の〈語り手〉が下人の行方を追い求めて探り当て得なかったのに対して、大正五年二月、『鼻』の〈語り手〉は主人公のそれからを深追いしようとはせず、そこそこのところに落ち着かせ、柔らかに包み込んだ。」と述べる。

授業者の、授業を通しての読みは、田中氏が言及する〈公然の秘密〉という異者排除の共同体には及ばず、また、「恭しい手つき」の解釈等田中氏の解釈と異なるところは多いが（注2）、作品の末尾の内供を「閉ざされている」と読むところは一致している。

授業を通して授業者に生まれた読みは、以下のようなものである。

#### ◆愛すべき内供 ～「傍観者の利己主義」という人間観を持つ〈語り手〉から見た内供～

鼻が短くなった後、人々があからさまに「つけつけと」笑うようになった理由がわからず、ふさぎこむ内供を、〈語り手〉は「愛すべき内供」と呼ぶ。生徒がこれを「未熟な内供をフォローする気持ち」「煩惱の塊の内供に少し呆れたから」と言うように、〈語り手〉は、内道場供奉の職につきながら思春期の少年のように心を痛める禅智内供に、呆れながらも温かいまなざしを向けている。

一方〈語り手〉は、人間には、「矛盾した二つの感情がある」と述べ、内供の鼻が短くなった時の周囲の人々の態度を「傍観者の利己主義」と批評する。すなわち、「傍観者の利己主義」という人間観(世界観)を持ち、恐らくそのことに傷ついている(冷ややかに人間を見ている)のが〈語り手〉と言えよう。その、人間の「利己主義」に傷つけられ悩む内供を、〈語り手〉は憎めずに愛おしく見つめていると言えよう。

#### ◆内供の視点と、〈語り手〉の視点 ～内供の自意識～

鼻が短くなった時に、内供は周囲の人々の反応を、「前よりもいっそうおかしそうな顔をして」「同じ笑うにしても、鼻の長かった昔とは、笑うのにどことなく様子が違う」「前にはあのようにつけつけとは笑わなんだて」と思う。以前も笑われていたことを内供は思い出しているが、〈語り手〉の冒頭からの語りでは、人々が「笑う」様子は描かれていない。弟子が食事の時に鼻を板で持ち上げることと、中童子の手がふるえて鼻を粥に中へ落とした話が京都まで喧伝されたこと、池の尾の町の者が「あの鼻では誰も妻になる女はないだろう」と「内供の俗でないことを幸せだ」と言っていることが、語られているのである。

「喧伝」には笑いが含まれていると考えて自然だが、生徒たちはその笑いを、驚き・興味という好意的な(悪意のない)笑いと、小ばかにする・嘲笑うという悪意のある笑いと両方が考えられると指摘した。〈語り手〉は、「誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切り抜けることができると、(略)もの足りないような心持ちがする」と、一般論になぞらえ周囲の人々の反応を説明するが、その説明に従うと、内供の長い鼻に対して周囲の人は「同情」していたということになる。そうすると、これまで皆に鼻を笑われていたと思うのは、内供の自意識、内供が捉える世界となる。鼻が長いことを皆が笑っていると思い、自尊心が傷つく内供の閉ざされた世界、自意識が〈語り手〉によって語られるのである。

#### ◆自意識の崩壊と新たな自意識

内供は、鼻が短くなれば、「誰も笑う者はなく、自尊心が傷つくことのない日々を送ることができる」と思っていたが、「つけつけと笑う」人々の反応に、ふさぎこみ、機嫌が悪くなる。そして、犬に「それ、鼻を打たれまい」と囁す中童子の顔をしたたか打ち、「鼻の短くなったのが、かえって恨めしく」なるが、そんなある夜、風が出て、風鐸の音がうるさいほど枕に通い、寝付かれないうちに、内供は鼻の異変に気付く。

「無理に短うしたで、病が起こったのかもしれぬ。」と内供は「仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を押さえながら」つぶやく。それまでの内供が通念としては理解していても、実際には認識することのなかった領域、「病」という人間を超えた世界と向き合うのである。鼻を疎み、不満を抱いていた内供の自意識が崩壊するのである。内供は仏に供えるように鼻に手を当てるのである。内供の前に、人間の世界を超えた「仏」の世界が現れ、鼻は、仏の前に供えるような尊いものとなり、内供自身もまた仏の前のかけがえのない存在となるのである。

翌朝、目にする光景は、「庭は黄金を敷いたように明るく、「薄い朝日に、九輪がまばゆく光っている」世界だった。内供は「薔を上げた縁に立って、深く息を吸い込」み、目に映る新たな光景、自然と一体化するのだ。そして、内供は鼻が元に戻っていることに気付く。

しかし、その気持ちは、「鼻が短くなったときとおなじような」「はればれした心持ち」だった。そして、短くなった時と同じく、「——こうなれば、もう誰も笑う者はないにちがいない」と思う。内供の生きる世界(内面世界)は、闇から光へと変わったものの、それは新たな「自意識」として困り込まれるのである。

鼻が短くなった時、「こうなれば、誰も笑う者はないのにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに目をしばたたく。満足したのは、内供の自意識の世界の中の内供だった。鼻が再び長くなった時、「——こうなれば、もう誰も笑う者はないにちがいない」と、「内供は心の中でこう自分にさきやいた」が、その「誰も笑う者はない」の「誰も」も、やはり内供自身なのである。

この元の鼻に戻った内供に対する周囲の反応は、作品には描かれていない。〈語り手〉の一般論に従うと、「もう一度」「同じ不幸に」陥った内供には再び「同情」が寄せられ、笑われることはなくなるだろう。一方、生徒たちが読むように、元の見慣れた姿なので笑わないとも考えられるし、相変わらず変で面白いので、再び笑う者はいるだろうが、内供は気にしないだろう、ということになる。

光に満ちた新たな「自意識」の世界で、内供は「長い鼻を明け方の秋の風にぶらつかせ」と、秋の風に鼻を(身を)委ねる。しかし、内供がその自意識の外側の世界、すなわち、自身の意識の向こう側の他者と、真に出会うことはない。周囲の人々に寄り添い、理解しようとし、自身を外から見つめ、受け入れて、「仏様がくださった、仏さまがいたずらなされたこの面白い形の鼻を、みんなで笑おうぞよ。」とはならないのである。自己完結している内供は、自分だけが安寧に生きるものであり、高い位につく僧でありながら、世の人々を救うことはできないだろう。

〈語り手〉が苦悩する「傍観者の利己主義」という人間の世界を一蹴し、悠々と生きてゆく「愛すべき」内供。だが、その強固な内供の「自意識」に、〈語り手〉は一抹の虚無感を抱くのではないだろうか。「はればれした心持ち」で生きてゆく内供と対照的に、〈語り手〉は人間の世界を寂しい気持ちで見つめ続けるのではないだろうか。

芥川は、『鼻』を書き上げた時のことを「やっと曲りなりにも結末がついたのは、成瀬と二人で久米の所へ行つた、その日の晩の事である。(略)自分はひどい気疲れと一しよに、何とも云へないはかない心もちがした。愉快なるべき小説が、一向愉快とも何とも思はれなかった」(「あの頃の自分のこと」別稿 大正8年)と述べている。(傍線引用者) 愉快なものを書こうとしたが、そうはならなかったと言うのだ。

だが、この「愛すべき」内供の姿を描いた『鼻』に、漱石は、「あなたのものは大変面白いと思います。落ち着きがあつて巫座戯てみなくつて自然其儘の可笑味がおつとりと出てゐるところに上品な趣があります。(略)敬服しました」と述べたのではないだろうか。

#### ◆授業を終えて ～生徒の中に立ち上がる読みを、新たな自身との出会いにするために～

授業者は、芥川が書こうとしたと述べている「身体的欠陥の為にたえず vanity(虚栄心)のなやまされている苦しさを、「自意識」と捉え、生徒が内供に共感しながら、内供の「自意識」を〈語り手〉とともに客観的に見つめ、内供の「自意識」がどう変化するか、そして、内供が認識する「世界」や、〈語り手〉が捉える「世界」を考えることによって生徒自身の自意識に向き合わせたいと思った。しかし、生徒たちがどれだけ自分自身と向き合えたかは心もとない。授業を通して、生徒が今まで気づかなかつた自分自身や世界に出会うことができたならと願っている。

そもそも、授業者自身が、どんな読みにとどり着くかが見えない中で、生徒とともに読んだのだったが、授業を終えて、私の中に立ち上がった読みは、生徒と同じではないと思っている。(内供が自己完結の中で平穏に生きながら、人々を理解できない姿、理解しようしない姿は、授業者の姿そのものであり、授業者を打ちのめす。)

授業を通して生徒の中に、生徒が自身と向き合い掘り起こされた読みが立ち上がっていること(立ち上がること)を期待し、今後も文学作品を教室でどう扱うか模索し勉強し続けたいと思っている。

\*\*\*\*\*

注1 田中氏は「語り手」を、ストーリーのメタレベルから語り、作品のメタプロットに読者を導く重要な位置にあるものとして、山括弧を付けた〈語り手〉と呼んでいるため、ここでも〈語り手〉という表記を使用する。

注2 田中氏は、論文の初めに「作品末近く、〈語り手〉は確かに寺内の庭の様子を輝くように明るく描き出すが、何故こんなにまで庭内が明るいと語られているのか、それと主人公の内面とはどんなふうに関わるのか、あるいは、これによつていかなる表現効果が齎されているのか。ところがどういう訳か、こうしたことに研究者の言及はきわめて少ない。」と述べる。この庭の風景の描写は、授業者が作品の中で最も重要と思った箇所である。

授業者は、「病」という自己を超えるものと遭遇し、これまでの世界(自意識)が瓦解した内供の目に映る、新たな世界の風景、と読んだが、田中氏は、鼻が短くなった後、中童子を殴りつけた内供が、「いかに己がみすばらしくもおぞましいものであるかに対する強い恐れを持たざるを得なくなり、それが彼を一種敬虔な気持ちへと化していったのである。内供の『恭しい手つき』はこうして生じた」と述べた上で、「内供には新たな自己認識の世界が展げてきた…。〈語り手〉もこの内供の心境にふさわしく鮮やかなほどに美しい翌朝の景色を語り出す。」と述べる。